



堀口大學全集

堀口大學全集

4

堀口大學全集

堀口大學全集

堀口大學全集 4

昭和五十七年十二月二十日印刷
昭和五十七年十二月三十日發行

著者 堀口大學

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田區富士見三丁目五十二
電話(東京)二六三一九二一八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

定價九五〇〇圓

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論、隨想、翻譯作品（小説・戯曲・評論・隨想）等の各分野に互って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（第4卷）は、譯詩Ⅲ及び補遺とし、本全集・譯詩Ⅰ・Ⅱに收録できなかつた譯詩をすべて採録した。
一、本卷・譯詩Ⅲの内容は、詩集單位で全譯されたもの三點（『アンドレ・ワルテルの詩』、『果樹園』、『惡の華』）と、未刊ながら單行譯詩集として整った原稿が遺されていた『ジャム詩集』とし、その他の譯詩は「譯詩集拾遺」と「未刊譯詩」に採録した。

一、詩集單位で全譯された作品は、著者の近代詩史に於ける役割と業績を明確にする方針に則り、すべてそれぞれの單行本初版を底本として使用した。

一、『ジャム詩集』は、第3卷の譯詩Ⅱに準ずるものとして未刊の自筆原稿『新訳ジャム詩集』を收め、これに「舊稿拾遺」を補った。底本にはすべて著者生前の最新稿を使用した（本卷・解題の「資料1」参照）。

一、これらの作品の中には譯詩Ⅰの各詞華集に收録されている作品もあるが、本卷では重複を厭わず採録した。但し、重複した作品はその所在を明確にするために、作品の表題下にその詞華集の略號と本全集第2卷所收員のノンブルを示した。その略號は左記の通りである。

〔月〕Ⅱ『月下の一群』（大正十四年、第一書房刊）。

〔空〕Ⅱ『空しき花束』（大正十五年、第一書房刊）。

〔新〕Ⅱ『新編月下の一群』（昭和三年、第一書房刊）。

〔青〕Ⅱ『青白赤』（昭和五年、第一書房刊）。

〔檳〕Ⅱ『檳榔樹』（昭和十八年、青磁社刊）。

〔フ〕Ⅱ『フランス詩集』（昭和二十九年、創藝社刊）。

〔海〕Ⅱ『海歌風』（昭和二十九年、新潮社刊）。

一、「譯詩集拾遺」には、著者のいづれかの刊本に収録されているにもかかわらず、譯詩Ⅰ・Ⅱから洩れた作品を採録し、それぞれ單行本初版を底本として使用した。

一、「未刊譯詩」には、雜誌發表あるいは草稿のままいづれの刊本にも収録されなかった作品を發表年代順（草稿の場合は執筆順）に採録した。また附録として、著者晩年の譯業である舊稿の異稿三篇、及び漢詩譯一篇をこの項の末尾に採録した。

一、本巻・補遺には、『註と解 佛蘭西現代詩の讀み方』と、著者の父九萬一の漢詩に著者自身が譯をつけた『長城詩抄』を採録し、ともに單行本初版を底本とした。

一、「ボードレール詩集」や『ジャム詩集』等に付されている序跋文は、本巻の解題の「資料2」に掲出した。「解説」や「小傳」が併録されている場合にはここには採録せず、第5巻の「評論」篇で扱う。

一、「詩人略傳」は、『フランス詩集』と『海歌風』に付されているものを併合し、詩家の生年順に排列した。

一、本巻本文の漢字假名遣等は、原則として底本通りとしたが、正字舊假名遣使用の本文は、次のような場合に限って訂正した。

1 誤字・誤植と判断されたもの。

〔例〕安堵↓安堵、堪念↓丹念、宮庭↓宮廷、翁子↓扇子、等。

2 假名遣・ルビの誤り（但し、用ひる、及び音便に關する表記は、底本通りとした）。

〔例〕斷はる↓斷わる、歩まふ↓歩まう、まぢつて↓まじつて、等。

3 脱字、及び送り假名不足で不自然なもの。

〔例〕移（ろ）ふ、踏（ま）へて、等。

4 著者の訛用と判断されたもの。

〔例〕揃えの↓揃いの、對しなければ↓對さなければ、等。

5 前後が轉倒したもの。

〔例〕龍土↓土龍、體肉↓肉體、食乞↓乞食、等。

6 俗字（但し、同字と見做される場合は雙方を並用した）。

イ 正字に改めたもの。

〔例〕潤↓闊、凜↓凜、鬱↓鬱、涼↓涼、戯↓戯、罰↓罰、効↓效、昂↓昂、腸↓腸、等。

ロ 雙方を並用したもの。

〔例〕竝⇨並、唇⇨唇、糸⇨絲、秘⇨祕、双⇨雙、廻⇨迴、回⇨回、等。

一、次のような場合は底本通りとした。

1 底本刊行當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判断出来ない用法。

〔例〕立琴、業蹟、等。

2 同語の異書體。

〔例〕何所⇨何處、此所⇨此處、蘆⇨葦、欲⇨慾、等。

3 踊り字。

4 外來語表記（拗音・促音の大小も底本通りとした）。

一、底本を訂正出来ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、本巻の解題には、本巻に採録された單行譯詩集のすべての書誌的な詳細を記し、改版等についても記述した。

一、巻末の譯詩總索引には、著者の譯詩に於ける全作品を、原題、雜誌發表形、表題等の異同、収録刊本の轉移、

本全集採録頁等を一括して表にまとめた。

譯詩Ⅲ

アンドレ・ワルテルの詩

5

果樹園

23

惡の華

73

ジャム詩集

285

*

譯詩集拾遺

387

サマン選集

389

動物小詩集

419

ボオドレエル詩集（講談社版）

419

堀口大學全詩集（筑摩書房刊）

428

日本の詩 堀口大學（平田文也編）

431

*

未刊譯詩

433

補遺

佛蘭西現代詩の讀み方

509

長城詩抄

647

詩人略傳

697

譯詩總索引	872
解題	757
校異・校註	745
作品細目	721

堀口大學全集 4

譯詩
Ⅲ

アンドレ・ワルテルの詩

アンドレ・ジイド

まへがき

アンドレ・ジイドの唯一の單行詩集『アンドレ・ワルテルの詩』(“Les poésies d'André Walter”)は、『手記』出版の翌年、一八九二年、巴里 Librairie de l'Art indépendant から出版された。『手記』同様、この詩集にも、「遺作」と註が入つてゐるだけで、作者の名は無かつた。

初版には、表題の次ぎに、*L'itinéraire symbolique* (象徴風な道中記)と小見出しがつけてあつたが、これはその後の諸版には消し去られてない。

一九三〇年、『アンドレ・ワルテル・手記及び詩』の決定版の爲めに書いた序文の中で、作者アンドレ・ジイドは、「今日自分は、苦惱の氣持なしに、否、辱し

の氣持なしに、『アンドレ・ワルテルの手記』を手にするといふことがない。」と書いた後で、「それに反して、これ等の『詩』の或るものは、或る種の歎びを以つてこれを讀みかへす。これ等の詩の殆んど全部を、僕は八日より多くない短時日の間に一氣に書いてしまつたのであつたが、恰も、『手記』が出版された直後であつた。この事實が、これ等の詩篇を、當時、僕の心の中ではすでにアンドレ・ワルテルは死んでしまつてゐたにも拘はらず、なほこの架空の人物の作だとなしたり、またこの表題が與へられたりした理由であつた。それどころか、『手記』の『アンドレ・ワルテル』には、到底これ等の詩篇は書けなかつた筈だとまで僕は思つてゐる。當時、僕はすでに、彼を追ひ越してしまつてゐたのであつた。」

ジイドは、毎年その母と共にそこで夏を過ごすことにしてゐたあの祖父母の代からの所有地ラ・ロックの莊園で、これ等の詩を書いた。當時、彼は二十二歳の青年であつた。

『アンドレ・ワルテルの詩』の中に現はれる「彼女」

の姿には、すでに幾分『手記』のエムマニュエルの幻のやうな影は薄らぎかけて、一つには『バリユウド』の中のアンザエルと、他方、『ユリアンの旅』第二部に於けるエリスの精神が感じられるのであるが、これがその後及んで、あの『窄き門』のアリッサにまで進展するのだと考へることは甚だ興趣の深いことである。

象徴の枝葉をすかして、若き日のわがジイドの、叡智と感性との交錯を、覗き見る楽しさに心をひかれて、譯者は思はず、これ等二十篇の詩を、いつとはなしに譯してしまつた。

譯者

アンドレ・ワルテルの詩

一

愛人よ、今年は春がなかつた。

花かげに歌聲もなく、匂咲く花もなかつた。

四月もなく、笑ひもなく、轉身トランスもなかつた、

私たちには薔薇の花絡はなひもが編めなかつた。

磯巾著のやうに赤く怯え易い九月の太陽が

不意に訪づれて私たちを驚かした

私たちはなほラムプの灯かげで

冬の古文書の上にうなだれてゐた。

あなたが私におつしやつた、「おや、もう秋が来てますわ。